

# 勇者がヒモに

なつたなら

著 ひーらぎ  
絵 杜崎ヨノモ



勇者がヒモになったなら

ひーらぎ

## 登場人物

● アルベルト・シュナイダー

本作の主人公。魔王を追ってアレボスから日本へ転移してしまふ。  
深雨と暮らすことになり、何もしない（させてもらえない）ヒモ同然の日常を送る。

● 水星深雨（みずほし みう）

本作のヒロイン。喫茶『雨宿り』の店長。常に笑っているような穏やかな性格。  
世話好きで誰に対しても優しい女神のような女性。彼氏を事故で亡くしてる。

● 桐花（きりばな）クシヤナ

雨宿りの常連客の一人。鮮やかな赤い髪が特徴でギャル系の顔立ちだが、中身はそこま  
でギャルっぽくない。現在彼氏募集中。

●大鳥（おおとり） レイネ

雨宿りの常連客。左右で色の違うオッドアイが特徴。  
現在は深雨に紹介してもらった会社で事務員として勤務。その正体はアルベルトとは別の世界から転移してきた異世界人。エルフ。

●佐倉夕蘭（さくらゆら）

大学入試で失敗し、自殺しようとしていたところをアルトに助けってもらった。  
それ以来ストーカーのように付き纏い、深雨から奪おうと企んでいる。

●ギブソン

アルベルトの仲間。浅黒い肌にごつい筋肉。  
スキンヘッドが特徴の神官。

● コトハ

アルベルトの仲間。むっちりした体型でかなりの巨乳。様々な魔法でアルベルトを支援する魔法使い。

● 嶋一郎 (しま いちろう)

深雨とアルトのことを昔から知ってる八百屋のおっちゃん。タバコはセブンスター派。

● 品田 (しなだ) アルト

深雨の彼氏だった男。3年前にとある事故で死亡。アルベルトとよく似た外見をしている。

## プロローグ

勇者業を休業してヒモになってから早三ヶ月が経過した。

かつて魔王を滅ぼすべく聖剣を手に戦っていた勇者が現在戦っているのは、彼女の女神を思わせる微笑みと、そろそろ何かしないと、そんな危機感。

しかし、自分の意思と裏腹に彼女がそれを許してくれるかは全くの別問題であり、「何もしないのも結構苦痛なんだよなあ……」

すっかり定位置になった喫茶『雨宿り』の入口傍、左手へレジカウンターと開閉大窓を望むカウンター席でホットコーヒーを啜る朝のひと時を過ごしていると、

カラン、コロン。

今日もカウベルの音が響く。本日のお客様一号だ。

半身で扉へ振り返ったのとほぼ同時に店内の掃除をしていた店長、栗色を薄くした髪を後ろでまとめた女性、水星深雨がとたと小走りですら来て来た。

「いらつしやい。またサボりに来たんですか？」

「息抜きだよ、息抜き。ブレンド、ホットでね」

「飲んだらちゃんと働くんですよ。また怒られても知りませんからね」

クスクス笑いながらコーヒーを淹れに戻った深雨を横目に、カップを傾けていると、  
「おかわり飲む？」

「えっ、じゃ、じゃあお願い」

「でも飲みすぎると夜寝れなくなっちゃうから気をつけなね。なら、オレンジジュースとかのほうがいいかな……。アルトはなに飲みたい？」

「コーヒーでいいよ。まだ朝だし。あ、あとさ……。おれ、今日から——」

カラン、コロロン。

邪魔するように再びカウベルが鳴る。

少しは空気読んでくれないかなあ……。

内心愚痴りながら、深雨へ空のカップを手渡し——『元』勇者、アルベルト・シユナイダーが頬杖を付いて、窓の外へ広がった五月晴れの空を覗き見た。

# 1章 「たのしい? 勇者のヒモ生活」

1

ポロポロに擦り切れた赤いジャケットを纏ったアルベルトが途切れ途切れの呼吸を必死に繋ぎ止めて、聖剣メルクの切先を魔王の額へ突きつけた。

「追い詰めたぞ、魔王……ッ！」

「追い詰めた、か。そう見えてもおかしくないわね」

背中へ絡みつく鮮やかな赤い髪を肩の上でクスクス震わせた。病的に薄く、散る間際の白百合を思わせる双眼からは敗北の匂いを微かにも感じさせることはない。

そんな余裕がアルベルトヘトドメの一手を鈍らせた。このままメルクを数ミリ動かせば脳天を貫くことも容易いはずなのに。

アルベルトが緊張と背筋へ走る悪寒を誤魔化すように唾液を飲み込んだ。

脳天を突くよりも首を切り払ってしまおう、メルクを下段へ構えた。

それを見た途端、今にも殺されそうな魔王がカラカラ楽しげな笑い声を上げた。一瞬の動揺を見抜かれた気がして、アルベルトの頬へ冷たいものが伝った。

「なにがおかしい」

「早くあたしを殺せばよかったのって思っただけよ」

「早くもなにもお前はここで死ぬ」

「時間切れてことよ。さっさと殺しておけばよかったのに」

両肩を大きく露出させた改造修道服姿の魔王が、ストールで拘束された腕を持ち上げてパチン、と鳴らした。瞬間、彼女の背後へ簡単に人を飲み込んでしまえる大きさの異空間が出現した。どこまでも深い真つ黒な空間は見てるだけで不安感を煽られる。

全身の毛穴をこじ開けられそうな巨大な魔力反応は違う——アルベルトが瞬間的に脳裏へ過ぎった可能性を潰すべく、メルクを振り上げた。

薄青い炎を纏った右手にメルクが受け止められる。

「甘いわね。だからこうなるのよ」

「空間転移魔法……か。それもただの空間転移じゃないよな、それ」

「さすが勇者ね。そうよ、逃げるが勝ちとも言おうじゃない？」

メルクを受け止めたままの右手の炎がより大きく揺らめいた。鼓動するように膨らんで、萎むを繰り返した炎が爆散。

咄嗟に後ろへステップ。アルベルトが魔力を注いだメルクで粉塵を払った。突風が巻き起こり視界が晴れる。

「それじゃあね」

魔王を包み止めた転移ゲートがその口を閉じ始める。

ここで殺り逃せば再びアレボスが壊滅の危機に陥るかもしれない。

アルベルトはなりふり構わず魔王へ駆け出し、辛うじて届くところへいる魔王へメルクを抜いた。

ひらひら散った修道服の布片へ舌を鳴らし、もう一步踏み込んで突き穿つ。しかしそれでも魔王へ傷一つ与えることはできなかった。

「行くしかないか……!!」

「アルベルトは完全に口を閉じようとしているゲートを睨み、唾液を押し込む。」

「アルベルト!!」

後ろで魔王の軍勢と戦う仲間を順に一瞥し、

「行ってくる!!」

どこへ繋がってるかもわからず、生きて帰れるか、そもそも出て来れるかもわからない暗黒空間へ飛び込んだ。

瞬間、前後左右、上下の平衡感覚が狂ったような気持ち悪さに襲われる。全身を押し潰すような圧迫感に嗚咽がこみ上げる。

世界から切り離されていく浮遊感に果たしてどれくらい続いただろうか。

地面へ投げ出されたアルベルトがゆっくり目を開けると——なんとということか。

「う、嘘でしょ……」

トンネルを抜けると、そこは見知らぬ世界だった。

どうやら民家へ転移したらしい。

木でできた床に、どうやって石を磨けばここまで光沢を抑えられるのか気になってしま  
う壁。そして見たことがない家財道具の数々。アレボスで目にしたことがない形式の民家  
内へ驚きながら、痛む身体をゆっくり起こす。

「ここは……。ま、魔王は……」

まだ転移のショックから回復できずにいるアルベルトが壁へ手を添えて、一先ず正面へ  
見える扉へ足を向ける。

「お、音……？ 水か？」

扉のすぐ傍で大量の水が溢れる音が鼓膜を触った。

もしかして魔王？

一度身構えはしたものの、そこからは魔王の気配も魔力も感じられない。となると、こ  
この住人ということになる。アルベルトが緊張感を吐息に変え、二つ並ぶうちの一つへ指  
をかけた。

「あのーすみませーん」

もわんもわん、湯気が押し寄せて視界がぼやけていく。お湯と石鹸が混ざった柔らかい  
香りへ閉じかけた瞼を持ち上げ直す。

「あの聞きたいことがあるんですけど——えっ!？」

あれっ!？ どうしてここに全裸の女性が!？ まさか、浴場!？

湯気の手へ現れた、薄栗色の髪を肌へ張り付かせた女性が何を意味するのか一瞬で理解  
したアルベルトが逃げるように回れ右。浴室を背中にする。  
しかし気になってしまうのが男の悲しい性。

おそろおそろ首だけを回してしまおう。

仄かに蒸氣した頬とぶつくりつやつやな唇が色っぽい、薄ぼんやりした幸薄の笑顔が可憐な女性と目が合ってしまった。可愛いより綺麗。嫌、そのどちらもバランスよく取り入れた顔立ちはアレボスの姫様なんか目じゃない。

たゆんだゆんな胸元からずれたタオルも気にせず、じつとこちらを見つめる女性は何を考えているのか。いろんなところが見えて肌色全開な視界へこちらが恥ずかしくなり、アルベルトが一步、また一步と浴室から遠ざかる。

「え、えつと……ち、違うんです！」

「う、うそ……」

アレボス言語じゃない!? けど、この言葉は知ってる。

勇者になったときに聖剣と一緒に授けられたあらゆる言語を自分の知ってる言語へ変換する『言語理解』のスキルを使わずに、アルベルトが言う。

「嘘じゃないです。本当ですから!!」

必死に弁解しようとするもナイスな言い訳が一つも浮かんでこない。せめて距離を取って自分が無害であることを証明しようとするも——なんとということか、彼女から一步、二歩と近づいて来るではないか。

逃がす気はないってこと?

歩くたび幸せいっぱいに踊るおっぱいからは逃げたくないのですが……。

アルベルトの顔から精一の微笑さえ消え、ついに背中へ壁が触る。足の力が抜けて、壁伝いに尻餅をついた。

「やっと帰って来た……やっと、やっと帰ってきてくれたんだね……」

両目へいっぱいに涙を貯めた女性が目線を合わせるようにしゃがんで、こちらの素性を聞くこともなく当たり前前に抱き締めてきた。ポリウム満点、夢と希望で膨らんだ胸に顔が埋まりかける。

もう何が起きてるか理解できず、アルベルトの意識が彼女の温もりに絡め取られそうになる。それをなんとか踏み止まらせたのは、この状況のマズさからだ。

搾りかす同然の理性を夢中でかき集めて、彼女を押し返そうと必死に抵抗する。

「恥ずかしがらなくていいんだよ」

しかしこの女性、全く引く気がないらしい。いや、引かなくて結構。ここはきつと天国に違いない。男の夢と希望とロマンを集めた楽園、ああ生きてて良かった！！ って、そうじゃない！

「ど、どういうこと？」

「三年ぶりに帰って来て第一声がそれってどうかと思うよ」

困った風に吐息した女性に益々事態が飲み込めない。アルベルトが首を傾げた途端、ぷくつと頬を膨らませた女性に両頬を軽く摘まれる。

「彼女をほったらかして、あの約束は嘘だったの？」

彼女！？ この女性は何を言ってるんだ……？

これは自分が見ている夢か幻術か。

アルベルトが目尻を震わせながら、より強く抱き締める女性へ一旦身を任せた。「もう離さないから……アルトは一緒にいてくれるだけでいいの」

耳元を撫でる彼女の声へ、アルベルトは押し止めてきた溜息をついに吐き出した。  
——もうどうという状況だよこれ……。

なんてことが、三ヶ月前。

「それじゃあ花壇にお水上げてくるから」

「それくらいおれがやるって」

店内の掃除を終えた深雨が入口の扉へ手をかけたのを見て、アルベルトがカップを置いて立ち上がる。ジョウロを受け取ろうと手を伸ばした。

「お花に水あげるだけだから、アルトはゆっくり休んでてよ」

もう休みすぎておかしくなりそうなんだって！

「おれがやるって。深雨さんこそ休んでてよ」

「うーん、じゃあお願いしようかなー」

アルベルトの、これ以上怠惰な生活を送るわけにはいかない。その訴えが通じたのか、深雨がふにやと目元を綻ばせてジョウロを手渡す。

「お水あげすぎないように気をつけてね」

「了解。じゃあ行ってくるよ」

なんとか今日最初の仕事をもらうことができた。

「でもこれで満足しちゃダメだよ……。なんとか働かないと……」

店先で季節の花が風にそよぐ姿に目を細めながら呟いて『雨宿り』の二階部分、布団が干されたベランダ部分を見上げた。換気のために開けられた窓からは居住スペースの一角である和寢室もチラリと覗ける。

「いい天気だなあ……」

空になったジョウロを花壇脇へ休ませて、大きく伸びをする。眠気を覚える心地いい気温にアクビを噛み締めながら背後へ広がる商店街の街並みへ首を回す。今ではすっかり見慣れた日本の風景へ溜息がこみ上げてきた。

「もう三ヶ月か……」

この世界、日本へはアレボスと違い、魔王どころか、魔獣、魔力と言った概念、その全てがオカルト扱い、存在していないらしい。世界を滅ぼすものは、魔王の驚異じゃなく核と呼ばれるミサイルや得体の知れない病原菌など魔力を行使して発現する事象じゃないからもう驚き、完全お手上げである。

勇者は必要なし、お役御免というわけだ。

それはアルベルト・シュナイダーが培ってきた数年、もしくは生まれてからの十数年を三ヶ月程度の短い期間で消失したことを意味する。

その代わりに得たものが二つの悩みじゃ釣り合うわけがない。一つ目はたった今一時的に解放されたからいいものの、二つ目に関しては解決策が見当たらない。

「どうすればいいんだか」

故にそう溜息をつかない日の方が珍しい。そして、職なし金なし知恵もなしのアルベルトを不自由なく生かしてくれた彼女への恩と罪悪感に死にたくなるのもまた日常。一刻も早くアレボスへ帰らないといけないのも重々承知だが、その方法も今のところは……。

「いい加減なんとかしないといけないんだけどな」

アルベルトがこの日何度目かわからない溜息をつくくと、

「また溜息。幸せ逃げちゃうよ？ 悩み事？」

開閉窓を持ち上げた深雨が「うん？」と小首を傾げていた。

「いや……違う。違わくないけど。深雨さん、おれももつと色々手伝いたいんだけど、なにかない？」

「特にないかな。お客さんもないし」

「そ、掃除とか。流石になにかしないと落ち着かないというか……」

ここにいちやいけな存在なのに余計居ずらいんだよね……。

内心眩きながら店内へ戻る。改めて自分の指定席同然のカウンター席へ腰を下ろすと、困り顔の深雨がぼんぼん、と頭を触った。

「わたしに気を使つて無理になにかしようって考えなくていいんよ。記憶を取り戻すのに焦る気持ちはわかるけど、今はゆっくりしてて。記憶なんてすぐ戻るから……そうなったら忙しくなるんだからね。あと、掃除は終わってるよ」

「はあ……うん」

この世界に来て二つ目の悩みがこれだ。

大窓へ飾られている一つの写真立て。この店をバックに数年前撮影したらしき写真がこちらへ無責任に幸せな笑顔を向けている。今より少し若い深雨とアルベルト——と同じ外見の男が並んでいるのだ。

常連で深雨のことをよく知る八百屋のおじさん曰く、写真の男は三年前に事故死した深雨の彼氏、品田アルトだそうだ。そして何の因果か、そこへ自分が転移して来てしまい、深雨に品田アルトが生きてる——と思わせてしまっているらしい。

実際そんな勘違いがあり得るはずないが、八百屋やほかの常連もそれより先は口を噤んで教えてくれない。

「ねえ深雨さん？」

「ん？ お腹空いた？」

「いや、品田アルトってどんな人だったのかなって」

「気になるか……気になるよね」

途端に声を小さくした深雨へ横目を流す。つい数秒前の女神を思わせる微笑みが雲に隠れた。

「私の大切な人で恩人。たったひとりの家族だよ」

「そうじゃなくて。そうじゃなくて……」

——どうしてそんな悲しそうな顔をするんだよ。

触れればガラスの破片のように粉々になってしまいそうな深雨へ押し止めていた心中を吐き出しそうになる。その顔を見るたび、自分が品田アルトと全く縁もゆかりもない、こ

の日本とも関係がない人間だと見透かされている気分になってしまふ。少しでも彼女を覆う雲を晴らしてあげたくて深雨の手を強く握った。

「手を握ってくれるのは嬉しいけど……ちよつと痛いよ」

「えっ、ああ……ごめん」

すぐ力を緩めるが、深雨はそんなアルベルトから何かを感じ取ったのだろう。深雨が指同士を絡めるように握り直したと思えば、

「前のアルトのこと聞いて……思い出したふりとかしなくていいんだから」

直後、改めて目にした深雨の顔に先程の悲しみはなく、凜とした強さをほのかに感じさせる微笑が込められている。

出会って三ヶ月経ってもこれだ。

自分の知らない、決して自分へ向けられることがない深雨の側面を知ってしまった。

「アルトはアルト。わたしはどんなアルトもちゃんと受け止めるから。大丈夫だから」

かけられる言葉に頷くことしかできない。深雨のとろける母性で膨らんだ胸へ抱き寄せられ、顔が埋まる感触はそれから数秒後のこと。

「ごめん……」

「気にしないで。生きてさえいてくれれば何度でもやり直せるんだから」

心のリラックスさせる声音にアルベルトは身体の芯から彼女へ染まりきっていくのを感じた。こんなにいい人を置いて品田アルトはなに勝手に死んでるんだ、そう思わずにはいられない。

あっそういえば手伝いの話。なんかまた誤魔化されちゃったような……。

「それで深雨さん、あの手伝いの話に戻るんだけど」

「またその話？ 元氣いいねー。元氣なのはいいことだけど、お客さん来ないしなあ」  
深雨が改めて店内をぐるりと見渡した。

「やることないんだよね」

「な、何かあるでしょ」

「とくにないかなあ」

綺麗に掃除が行き届いた店内、ピカピカのL字カウンタートーブル、顔が反射しそうな窓ガラス。確かにやることはないように見える。しかし、今日の活動が水あげだけなのはなんとしてでも阻止したい。

「そこをなんとか！ なんでもやるから」

「でもなあ……」

「買い出しとか！」

「夕方一緒に行こうね」

「なら……深雨さん休憩しててよ。その間おれが見てるからさ。お客さんもいないし」

「そうなの。だから今も休憩してるようなものなんだよね」

アルベルトの熱意もニコニコ顔の深雨へは欠片も届いてくれなかったらしい。ならせめて座っててくれないと、アルベルトが腰を持ち上げると、

カラニコロン。

この退屈ムードを払拭するカウベルが響いた。アルベルトからすればこの怠惰な時間から抜け出せる福音そのものだ。

アルベルトが食い入るように振り返ると、肩の下あたりで綺麗な紅葉も思わせる赤い髪の女の子が立っていた。インドア系というより、病弱と呼んだ方が相応しい顔と華奢なシルエットに妙な既視感を感じてしまう。しかし記憶と一致する人物はひとりも浮かんでこない。

更に近くで見ると、パツチリ開かれた瞳を細められた。雪花をモチーフにした髪飾りを抑えながら首が傾く。

「どうかしました？」

「い、いや……ごめん。なんでもない」

「そうですか？ えつと……あつ、もしかして！」

彼女へ見つめられたかと思えば、両手を合わせてカウンターの深雨へ目をやる。

「あつ、クシヤナちゃん。いらつしやい、久しぶりだねー」

「おひさでーす。この人が例のカレシさんですか？」

「まあね。クシヤナちゃんは会うの初めてだよね」

「ですす。写真では見たことあるんですけど……へえ」

カウンターテーブル中央の席へ座った彼女の視線はアルベルトだけを捉えたままだ。

「はじめまして、桐花クシヤナです。見ての通りJKってやつですよ、どうです？」

あたしと遊んでみませんか？ お兄さん、えつとアルトさんでしたっけ？ アルトさんなら大歓迎ですよ」

「えっ……：そういうのはちよつと……」

なんか独特なノリだなあ。

今まで接したことがないテンションに戸惑いながら、チラリとカウンターの方を見てみる。深雨は怒ってないだろうか？ 品田アルトとしての立ち振る舞いはこれで正解か？

そんな心配を覚えていると、深雨がクシヤナへコーヒーを持ってきた。

「ホットコーヒーでよかつたよね。あと、貰い物だけどケーキも食べて」

「やつたー、実は今月お小遣い使いすぎてピンチだったんですよ」

クシヤナが用意されたコーヒーで両手を温めながら深雨へ目を綻ばせた。

「ふふ、うちで働く？ クシヤナちゃんなら大歓迎だけど」

「あたしの学校バイト禁止なんですよねー。それにあたしが働いたらカレシさんとイチヤイチャできなくなっちゃいますよ？ あたしは気にしませんけど」

「大人をからかわないの。アルトもケーキ食べるよね」

どうやら怒っていないらしい。盆でたわわな胸を押し潰した深雨の微笑みが向く。咄嗟のことにアルベルトが機械的に返事をする、

「ぼうつとしてどうかした？」

「な、なんでもないよ」

「アルトが何考えてるかくらいわかるよ。クシヤナちゃんと話したくらいで浮気だあーつて怒ったりしないよ。子供じゃないんだから」

ちよつと違うんだけど……まあいいか。

アルベルトが一先ず微苦笑でその場をしのぎ、用意されたケーキへフォークを通して一口。生クリームにもいちごが使われているらしく、程よい酸味を含んだスポンジが口の中でほろりと溶けた。

アルベルトが再度ケーキへフォークを入れたところで、カウンターへ頬杖をついてニコニコ笑う深雨の視線へ気づく。

「深雨さんは食べないの？」

「んー、アルトが美味しそうに食べてるならそれで十分だから」

「でもおれだけ食べてるのも悪いし……」

アルベルトがフォークに乗せたケーキを深雨の口伸ばした。深雨のキョトンとした顔に気恥かしさを感じずにはいられないが、それもまた可愛らしい。まるでこちらの意思が通じていないような——違う。

よく見ると、深雨の口元が少しだけ緩んでいるじゃないか。期待するように持ち上がる唇に自分が遊ばれていることに気付いた。しかしここまで来たら引くのはきつと許してくれない。

薄目を閉じ、唇を半開きにしたただけなのに妙に性的に映る深雨へフォークを近づけ、

「あ、あーん」

精一杯の羞恥心もトッピングしたケーキを深雨がはむつ、と唇で包んだ。名残惜しそうに瞳をトロけさせた深雨が頬へ手をやる。

「んー、美味しい。アルトが食べさせてくれたからかな」

「最初からこれが狙いだったでしょ」

「どうかな？ アルトのすっごい恥ずかしそうな顔も見れたし大満足ですよ」

「恥ずかしくて死ぬかと思ったんだから」

「そうなたらわたしも一緒に死んであげるからねー。あと……」

おもむろに伸びた深雨の指先が右頬あたりをなぞり、

「ついてたよ、クリーム」

クリームが乗った人差し指へキスするように啜える。ちゅっ、と心音が弾けそうな音色にアルベルトが俯いてしまう。

「あ、ありがと」

照れを精一杯隠して顔を上げた直後、右手の視線を思い出す。錆び付いた扇風機のようなぎこちない動きでクシヤナへ首を回した。

「見せつけてくれますね。こっちはカレシもないさみしい青春を送ってるのに」

「あらあら見られちゃった」

どうしてこんなに呑気に笑っていられるのか。それとも恥ずかしがってる自分がおかしいだけ？

アルベルトがコーヒーの苦味で羞恥心を押し殺そうと熱々のを一気に煽った。

「でも桐花さんに彼氏がいないのは少し意外だな」

「だよねえ。彼氏じゃなくて好きな男の子とかはいないの？」

「いないですよー。いたら店長さんに相談しますっつー」

「クシヤナちゃんモテそうなのになね」

「モテるですか……あの……実はですね」

それまでスキップするような口調だったクシヤナがフオークを皿へ戻して溜息を一つ。それだけで場の空気が深刻さを受け入れたように引き締まった。アルベルトが椅子へ座り直したのをキツカケに、

「最近……ストーリーカーにあってるみたいなんですよね……」  
クシヤナが背後の窓を気にするように半身した。

2

そのストーリーカーが始まったのは今から大体一ヶ月ほど前らしい。

「最近、こちら辺で誘拐事件もあるし……なんか怖くなって」

「警察には連絡したの……?」

クシヤナを心配した深雨が隣へ腰を下ろした。クシヤナが萎むように頷く。

「でも……まだ何もされてないからって話を聞いてくれただけで」

「何もされてないってストーリーカーにあってるだけでなにか起きてるよ」

「まあまあ、落ち着いて。それでストーリーカーは見たの?」

アルベルトがテーブルへ手をつけて立ち上がるも、深雨の微笑に制されて静かに腰を下ろし直す。何となく今もストーリーカーが身近に潜んでいる気がして、大窓から覗く商店街の風景を振り返る。

「今日もそのストーリーカー? はいたの?」

「はい……あのこの商店街に入るたびに。この商店街でだけ、感じるんです」

「ここだけ……？」

「変な話ね」

互いに顔を見合わせて深雨と頷き合う。

「そのストーカーも女の人みたいで……」

「女の人？」

クシヤナの細い声にますます謎が深まった。相手が男でないとすると逆恨み目的か？

深雨へ視線をやっただけで、こちらの意思を汲み取ったのかアルベルトが言うより早く彼女の口が動いた。

「その人ってクシヤナちゃんの知り合いだったりするの？」

「い、いえ……それが知らない人で。ちゃんと見てはないですけど……友達とかなら気が付きますから」

「そうよねえ……」

深雨が頬へ手を当てて吐息した。

心配しきって微笑が崩れていく深雨へ変わってアルベルトが外を気にしているが、相変わらず店先を過ぎるのは見慣れた商店街の面々。まさかこの中にストーカーが紛れているとは思えないが——アルベルトがゆっくり腰を上げた。

「一応外に変な人がいないか確認して来るよ。誰もいないってわかったら少しは安心するでしょ」

「そうね……クシヤナちゃんもいい？」

「はい……あの、アルトさん。ありがとうございます」

「いえいえ。これくらい大したことないから。じゃあ行ってきます」  
扉へ手をかけた途端、

カランコロンカラン。

「深雨サン、レイネさんが来ましたですよー」

店内を埋め尽くしていた緊張感を片っ端から砕く陽気な声が真ん前へ跳ねるように飛び込んで来た。金と薄緑のふわふわロングヘアが視界を流れていく。咄嗟のことにアルベルトが尻餅を付きそうになり、

「おっと、これは大変失礼しましたでございませぬ。お怪我はないですか？」  
眠そうに閉じられた目元にゆったり微笑みを作った女性に手を引かれて、よろけた身体を立て直す。

「あつ、平気です。そっちは？」

「レイネさんでございませぬか？ レイネさんは大丈夫でございませぬさね」

「ならよかったです。えっと……」

「大鳥レイネさんでございませぬですよー」

左右で髪と同じ彩に分かれた瞳、オッドアイと交差した。本当にいるんだ、と驚きながら握手へ応じる。

「あつ、品田アルトです」

なんか不思議な感じの人だなあ。

日本人ならまず似合わない髪色や瞳色も彼女の気品溢れる雰囲気と、アレボスの深森で暮らす精霊族のように中性的な顔立ちがあらゆる違和感を根こそぎ排除していた。丈が長いクリム色のワンピースも不思議とドレスに見えてしまう。

アルベルトが彼女の独特な雰囲気に目を奪われていると、

「今日は久しぶりの人が多いわね。お仕事はどう？」

カウンター席へ座ったまま深雨がレイネへ身体を回した。

「ようやく慣れてきたところでございますよ。紹介してくれた深雨さんには感謝感激でございますねー」

「ちゃんと続いているならよかった。いつものでいい？」

「はい。深雨さん、この方が彼氏さんでありますね？」

「そうなの。この前帰って来てねえ」

「そうでありましたか。ふんふん……なるほどなるほど」

ふわふわ髪も一緒に頷かせたレイネが、今度はこちらへ目を投げた。

「な、なんですか……？」

思考が読めないオッドアイに見つめられて数秒。一切思考が読めないレイネへ居心地の悪さを覚え始めていると、

「あなたもそちら側の人間……異世界人でありましたか」

「——ッ!？」

口辺を擧り上げて唱えられた言葉に、アルベルトはすべての緊張や動揺が引っ込んでいくのを感じた。

今この女は何を言った!?

両目を見開いて彼女を直視し直す。

『異世界人でありましたか』

確かに、間違いなくこの女は今そう口にした。

どうして見破られた? というより、なぜその単語を迷いなく言うことができた?

アルベルトが瞬間的な衝撃に言葉を失ってしまった。しかしこれは吉報かもしれない。彼女も異世界人なら、アレボスへ帰れる可能性が見つかるかもしれないのだ。彼

アルベルトが早る心音を抑えて細い呼吸を繰り返している、

「ミルクティーとお仕事続いているお祝いでケーキ。貰い物で申し訳ないんだけど」

カップと先程食べたのと同じケーキを盆に乗せた深雨がテーブル席へやって来た。アルベルトは途端に我へ返り、

「えっと……外見て来ますね」

入口の戸へ手を伸ばした。

「あつ、待ってアルト。レイネちゃん、ここに来る途中で変な人見なかった?」

「変な人でございますか。花壇のところを一人いましたですね」

直後、アルベルトが店内を飛び出た。入口を右手へ回ると——確かにレイネの言った通り怪しい女性が一人。長身を猫背に曲げて、這うような姿勢で聴診器のようなものを壁へ押し当てていた。盗聴だろうか?

アルベルトが足音を殺して一歩、また一歩近寄る。

「あ、アルトさん……きよ、今日も……や、やっぱり本物……ふひひ」

譚言のような呟きにアルベルトが首を傾げた。

足音へ気付いたのか、ボサボサに乱れた灰色の髪を乱して不気味な笑い声を漏らす女性が耳から聴診器を外してこちらへ顔を上げる。数秒の交差、女性もこの展開は想像していなかったのか、しばらく無言の時間が続く。そして、最初に動いたのは女性の方だ。

「あ、あ、あああ、アルトさあん。ほ、ほんもの、ほんものですね」

膝上に乗せていたリュックを放り投げて一目散に駆け寄って来た。アルベルトが半身で躲そうとする。しかし座っていたせいで気づけなかったが、この女性、手と足が異様に長い。

想像より早く迫られたアルベルトがあつと言う間に抱き付かれ、花壇傍へ押し倒されてしまった。

女性が深い隈が染み付いてくたびれた顔に笑みを乗せて、当たり前のように唇を近づけてくる。アルベルトが顔を背けて抵抗。

「アルト!!! 大丈夫!?!」

「あつ、この人!」

「アルトさん、大丈夫でございます!?」

深雨の声を戦鬨に、三つの人影が視界の隙間へ飛び込んでくる。

助かった、アルベルトが安堵の域を漏らしたのも束の間、

「な、なな、なんですか!!! あ、あなたまでアルトさんを狙う気ですか!!! だ、だ、だ、ダメですよ、アルトさんは私と結婚するんです! 邪魔しないでください!」  
この女、ほんとになに言ってるんだよ!!!

勇者がヒモになったなら (試読サンプル)

ヒステリックな女の叫びが柔らかい日差しに照らされた通りへ歪に反響した。

# 勇者がヒモになったなら

発行日

2016年8月14日 コミックマーケット90

発行者 よろづ屋本舗

<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

[yoroduyahonpo@gmail.com](mailto:yoroduyahonpo@gmail.com)

著者名 ひーらぎ

<https://twitter.com/rag0311>

イラスト 杜崎ヨノモ

編集 黒ねこ作(@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。